

第8回総会&現地報告会

【東京】10月1日(土):武蔵野芸能劇場

【大阪】10月8日(土):高槻現代劇場

詳細につきましては、別途改めてご案内いたします。
皆様のご参加、お待ちしております。



屋根の上で乾燥させた飼料を下におろすشوワイブ

3月11日の東日本大震災の発生から2ヶ月が経とうとしております。しかし、いまだに、あの日のことを思うと言葉が出てきません。ご家族を亡くされた方、家を流され築き上げたものを無くされた方々に、心よりのお見舞いを申し上げます。

震災直後、「カンダハール市(アフガニスタン南部)が『今までの支援に感謝して』と400万円の義援金を送ってきた」との新聞記事を見つけました。続いて、アフガニスタン政府から多額の寄付が届いたとの記事もありました。記事は小さなものでしたが、胸が熱くなりました。カブールからは安井さんはじめ、アフガニスタンの古くからの友人から、お見舞いの電話をいただきました。たくさんの方々が日本と、そこに住む皆様のことを案じていることをお伝えしたいと思います。

前号で、みなさまにお願ひしていた「サフダル遺児育英基金」のその後についてですが、わずかの期間に、大勢の方から、多額のご寄付をいただくことができました。私どもの期待を上回る金額に驚き、そして安堵しております。本当にありがとうございます。皆様の温かいお気持ち現地へ届けたいと思います。ただ、今年度の公式訪問は春の予定でしたが、震災の発生、その他諸事情により、8月または9月に延期されることになりました。また、会報の発行も予定より1ヶ月ほど遅れてしまったことを併せてお許しください。現在、サフダルの家族には、いままでの給与支援金を届けておりますが、今後、どのような形がいいのかを現地で家族を交え、よく話し合いたいと思います。

夏の訪問では、山の学校の子どもたちに、復興に取り組む日本の姿を伝えられればと念じております。

2011年5月10日

長谷川洋海



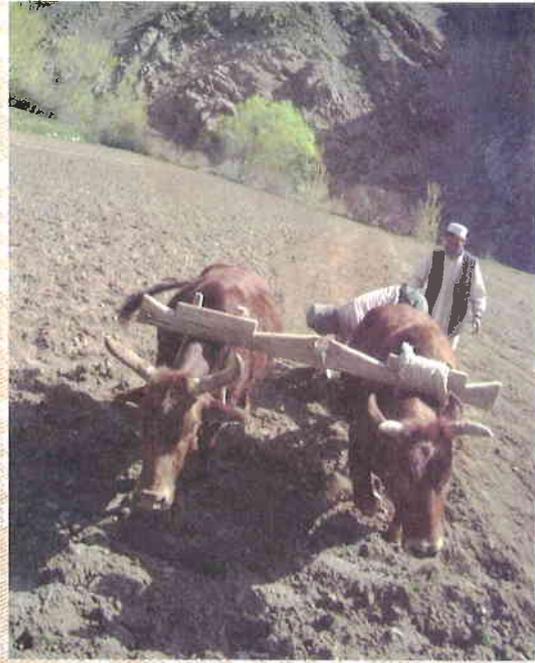
ナイマ

高～い所に住んでいます。ナイマが学校に通う途中で、毎日、目にするバル村のモハドハーンさんの家ですね。アズンの木がきれいに植えられ、畑もきれいに手入れされていますね。山の学校の子どもの故郷そのもののような写真ですね。



ソマイエ

ソマイエのお父さん、コタツに入ってくつろぎ中
寒いのか、こたつに入ったお父さんをソマイエが撮った一枚。グリーンを目をしているソマイエによく似ていますね。家の壁は白く塗られ、そこに釘を打ち、衣類をかける…よく見る光景です。コタツカバーは赤、みんなが好きなザクロの色ですね。寝る時には、このカバーが布団に早変わりします。



畑仕事 このあたりは開墾された平地多し。牛を使つての耕し作業。やっとながら雪が溶けて、これから種をまくところなのでしょう。最初は小麦を植え、その収穫のあとにトウモロコシという順番があります。それでも、畑にできる土地が少なく、収穫は足りないのでは貯で買います。



ソマイエの自宅

ソマイエの住む集落を撮った写真。下から仰ぎ見ると、まるで、手ベットの家のようですね。アジアから中央アジアにかけて、シルクロード一帯で見られる「土壁の家」です。地震で崩れるのも早いけれど、すぐ自力で建て直すこともできます。



妹たちとお食事中

妹たちが食事しているところでしょうか。ルビア(豆)と白米の食事はアフガニスタンではポピュラーな献立の一つです。大きな皿に盛られた白飯をスプーンを使ってみんな食べている光景がいいなあ。やっぱり、たくさん食べる食事が一番ですね。



下校する山の学校の子どもたち

(右の男の子はサフタル校長の息子) さすが、ナイマ。プロ顔負けの構図に脱帽です。真ん中の三人組が中心でしょうけれど、後ろの傘を差した二人。手前と左の人物が見事な遠近感をだして、写真に奥行きを与えています。うまい!



シュワイブ

みんなで一緒に帰宅中「(私の)カメラバックを持ってあげるよ」というので、持ってもらうと、いつの間にか撮影しているのがシュワイブ。さすがが愛弟子(?)。あわいピンクの花をつけたアズンの木の前で、姉や同級生を撮る記念撮影も構図が見事です!



シュブファ先生

バザラックにある家の裏のパンシール川

家の裏を流れるパンシール川を撮った写真ですね。学校の横を流れるポーランデ川はパンシール川に注ぎ、カフル川と合流。最後はインダス河になって、インド洋に流れます。川辺で涼しい風を感じながら、お茶を飲んだり、食事をするのがパンシールの人々の最高の贅沢なのです。

シュグファの妹、うさぎを抱いて

白ウサギを持った妹を撮影する森さん、高橋さんをさらにシュブファ先生が撮影している一枚。高い塀に囲まれた家の中で、こんな動物も飼われているのを知ってびっくりしました。そういえば、カフルでも動物園は大人気でした。みんな動物好きなんですね。



シュワイブのお母さん

こたつに入ったシュワイブのお母さん。アフガニスタンでは、慣習として、女性は異邦人に顔をあまり見せてはいけないので、私に顔を見せたことはありませんが、家族の前で見せるくつろいだ表情が新鮮ですね。



朝食中の一家

お父さんとお姉ちゃんのスーラ、そして小さな弟たちと昼食を食べていた時に、パチッ。ナンと紅茶だけの質素な食事。ポットからお茶を汲む弟のスポンからのぞいたお尻がかわいい。家族にしか撮れない飾らない一枚がいいですね。



ポーランド写真館

当会が発足してから今年で8年目。

会報「ばあーる」も本号で20号を迎えました。

今回は山の学校の所在地であるポーランド村とその周辺の写真特集です。

山の学校の子どもたちにカメラを渡して、感じるままに撮影してもらいました。

そこにはまさに「そこに生きる人間」そのものの姿が…。

生まれた時代や場所が違ってても、「今」を大切に精一杯生きている人たちが
 かくとよく見えるのは、やっぱり万国共通なんですね。

長倉代表の講評とともに楽しみみてください。



泣く子は育つ

うわあ、すごい泣き顔。顔の傷やシワがはっきり見えるほどアップ撮影。グッと寄っているのがいいねえ。感心しました。後ろに積まれた石は玄関への登り口ですね。それにしても派手に泣いているね。よっぽど、カメラが怖かったのかなあ。



アタウラ



ヤシン先生の弟、アフバルと子供たち

ヤシン先生のイケメンの弟アフバルと先生の子どもたち。家の裏手で撮った写真ですね。後ろの木はクルミかな？実をとるためかハシゴがかけられていますね。アフバルは運転手で、ジャララバードで大怪我をしたのですが、やっと歩き、運転出来るくらいに回復したので、良かったですね。爽やかな笑顔が素敵です。



カマドで朝食準備をする アブドルワセル(1年生)

油缶を再利用して作ったカマドで、ご飯を炊くところですね。ヤシン先生の息子が吹きこぼれないように見ているのでしょうか。



近所に住むクラムティーン(6年生)

台所でしょうか。後ろのドラム缶の上に乗っているのは、旧ソ連軍の弾薬箱。角に金具をつけて、立派な物入れにしているのがすごい。弾薬箱をばらして作られたドアもあったなあ。クラムティーン君は台所で何しているのかな？おだやかで、いい表情です。



ヤシン先生



ショーゲル



ニギナ(右)は山の学校の1年生

娘のニギナと息子を撮った一枚です。後ろには山の学校や下の町バザラックに続く道とヒンスークシの山並みが見えていますね。それにしても、ニギナのおしゃまな感じと、足を開いてどっしりと立った弟との対比が微笑ましいですね。



シャームルザー先生

山はアーモンドの花ざかり

山の下に広がる緑の木々がいいなあ。芽を出し始めた木々をいい感じで配置しています。そびえる山も立派ですね。子どもたちの目に映る「ポーランド」という素敵なお一枚に拍手です。

ドストムハンマド先生(退職)と ハーンミルザー先生

家を出て、学校に向かう先生たち。後ろのモスクは建てられたばかり。この地域出身の方が建設資金を寄付してくれました。出身地にイスラム寺院を寄付することは彼らの誇りです。「故郷に錦を飾る」ことになります。



サフダル遺児育英基金

「サフダル校長遺児育英基金」へのご協力、ありがとうございます！

「ばあーる」19号でサフダル校長遺児への育英基金のご協力をお願いしましたところ会員はじめ支援者のみなさまから温かいお志をたくさんいただきました。

会報発送直後から、そして大震災にもかかわらず、これまでに226人の方から185万7595円のご寄付をいただきました。(5月10日現在)ご寄付いただきました皆様、ありがとうございます。

また、振込票の通信欄には「サフダル校長先生は私と同じ歳で亡くなられたのですね。お悔みとともにご家族の幸せを祈っています」「38歳で逝かれたとは：長倉さんのご無念が偲ばれます。せめてお子さんたちを支援してさしあげてください」「私も透析患者になりましたが、このたび命を救っていただいたので応分の協力をします」等のメッセージも寄せられ、みなさまがサフダル校長の死を悼み、遺された子どもたちの行く末を家族のように心配してください。サフダル校長も天国できっと感謝しているのではないのでしょうか。

なお、「育英基金」は公式訪問の際に届け、具体的な活用につきましては現地でご家族とも話し合い、帰国後に改めてご報告させていただきます。

(比留川 征子)

広がれ！パネル展のわ

●3月26日からの3日間、千葉県松戸市の英会話教室でミニパネル展を開催しました。手作りのスタンドでパネルを展示したり、アフガンの歴史や場所、生活の様子などが分かる展示物を貼ったり、また「アフガニスタンの少女マジャミン」の本の読み聞かせを日に何度も行ったりしました。来場者からは、「心が洗われるような気分になり、日頃の悩みが小さく感じられた」とか、「元気をもらいました」「世の中にはこのような活動をしている人もいる事を知った」との感想をいただきました。また、今回の震災を受け、急ぎよ、東日本大震災義援金の募金活動を路上に立つて行ったところ、4万1773円の募金が集まりました。なお、当会にも1万2500円の寄付がありました。(寄稿：右黒晴代さん)



●長倉代表が19年前からはほぼ毎年訪れている今村学園高槻幼稚園において、11月3日に行われる「ひなぎく祭」で、毎年、写真展を開いています。園児達は準備の時に次々とやってきて、初めて山の学校の子ども達と出会います。アフガニスタンを地球儀で示しても「？」だけでなく、「笑って、写真の笑顔を見て自分も嬉しくなっている園児達。笑顔で世界共通語やねんなあ。当日は、卒園生や保護者が写真の前でプチ同窓会、それぞれの心に長倉代表の写真があり、みんなをつないでいます。(大阪連営委員 辻内奈穂美)



事務局から

●「サフダル校長遺児育英基金」にご協力いただいた方にはすでに別便でお礼状を送らせていただきました。2011年度分割会費納入の郵便振替用紙を同封させていただきました。納入済金額は封筒宛名ラベル下段の数字ですのをご確認のうえ、指定期日までに納入をお願いいたします。なお、残額会費を一括納入されてもかまいません。

●住所変更の場合はお手数ですが事務局にご連絡をぜひお願いいたします。

●不要切手・書き損じはがきのご提供、ありがとうございます。今回は会報送料の半分はご提供の切手を使わせていただきました大変助かっております。引き続きご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

●日ごろのご支援に感謝を込めてポストカード1枚を同封させていただきました。どうぞご利用ください。なお、ポストカード(第2集、第6集)はまだ在庫に余裕がありますので、これを機にぜひご購入いただければと思います。

ムルサルさんのカブール通信

「がんばれ！ニッポン」



このたびの東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。さらに被災された皆様やそのご家族の方々に対しまして、心よりお見舞い申し上げます。

地震の起きた3月11日、私は経営するカブールの日本食の「レストラン弁当屋」にいつものようにやってくるや否や、お客様の一人に「今日日本は大変なことになっている。日本全体で地震が起きた」と告げられ、あわてて京都に住む妹に電話を入れたところ、関西エリアは揺れたものの地震の被害はないと。早速テレビのBBC放送に目をやると津波で押し流される家屋の映像が……。10年前の9・11同時テロの映像を見た友人が映画のシーンと間違えたという話がありますが、今回の地震もそれに劣らず。

そして起こった原発問題。関東地方の友人たちは、放射線が心配で避難し始めたとのこと。いったい日本はどうなってしまうのか？日本にいない自分は、現状把握もままならず、かたずをのんでテレビに見入るだけで、何もできないのがとても歯がゆい。しかし、日本の大災害を知ったアフガニスタンの人々からは、暖かい励ましの言葉を頂きました。アフガニスタン政府もおよそ8千万円の義援金を日本政府に送り、戦後の混乱がまだに続くアフガニスタンの人々は、「日本は、損得勘定なしでアフガニスタンに対して支援をしてくれている。今こそアフガニスタンには、できる限りの支援を日本に対して行うべきだ」と。街で私を見かけた知らない人からも、私が日本人だと知るとお見舞いの言葉をかけてくれた。アフガニスタンにも良い意味で人々の生活に余裕ができたということだろうか。私も何かできることはないかと「レストラン弁当屋」に募金箱を設置したところ、早速アフガニスタンの人々が募金してくれた。カブールから今後の被災地の復興を祈らずにはられない。



お見舞いの言葉をかけてくれた。アフガニスタンにも良い意味で人々の生活に余裕ができたということだろうか。私も何かできることはないかと「レストラン弁当屋」に募金箱を設置したところ、早速アフガニスタンの人々が募金してくれた。カブールから今後の被災地の復興を祈らずにはられない。



〒187-0032 東京都小平市小川町1-1071-15 比留川 征子
 FAX & 留守番電話：042-345-7805 E-mail: info_yamanogakko@yahoo.co.jp
 http://www.h-nagakura.net/yamanogakko
 郵便振替口座：00160-1-667404
 編集：天野みか 岩動 崇 大守 裕 佐々木 瑞紀 水間 真紀
 題字：イラスト 近藤 理恵 デザイン：浅井 充志 印刷：(有) アドタック

アフガニスタンの学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会った、パソニール浜谷ホラーンテ村の子どもたちの教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年2月に設立、以後2014年3月までの約10年間にわたり活動を続けていきます。